

TJFニュース

「TJFニュース」では、TJF（国際文化フォーラム）の活動報告や、事業に関連するさまざまな動きをニュースとしてまとめ、お伝えしていきます。

■日本の中国語教育関連事業

第4回高校生サマーキャンプを北京で実施しました

TJFは、中国語を学ぶ日本の高校生90名と引率者7名、計97名の参加を得て、中国語力の向上、中国の人びととの交流、中国（文化）理解を目的とする第4回「中国語を学ぶ日本の高校生のための短期中国研修」（通称「漢語橋：日本の高校生サマーキャンプ」）を、7月24日（土）から8月2日（月）の日程で北京にて実施しました。この研修は中国国家漢弁が主催するもので、文部科学省の協力、在中国日本国大使館、在日本中国大使館教育処の後援、ANAの輸送協力、北京経済技術開発区実験学校の受け入れ協力を得ています。

充実した研修内容

日程の前半は、中国語学習歴によって生徒を入門、初級、中級の3レベル、計6クラスに分け、中国語のネイティブによる20コマの授業を行いました。授業では、自分や家族、学校を紹介したり、趣味や夢を語ったり、連絡先を交換したりするのに必要な表現や、買い物、値段の交渉に必要な表現を中心に学びました。その後、家庭訪問、現地高校生との交流、買い物体験を通じて学習の成果を試しました。

後半は、万里の長城や故宮、天壇などの世界遺産の見学および胡同（フートン）体験（人力車乗車、散策、四合院住民への訪問）を通じて、北京のさまざまな姿にふれました。

今年は特に交流の充実を図り、日本の生徒90名と実験学校の在校生30名（一部、日本語学習者を含む）が丸一日を使って、文化体験授業（太極拳、ひ



（上）授業では中国語のネイティブが熱心に指導にあたった。（下）実験学校との交流昼食会では、筆談を交えながら積極的に交流に挑んだ。

ょうたん笛、切り絵）、交流昼食会、買い物、餃子作り、交流の夕べなどの活動をいっしょに行いました。家庭訪問では、5名ずつグループに分かれ、18の家庭を訪問しました。また、参加者同士の交流を兼ねた活動としては、六つの生活班に分かれ、毎晩、班会議でその日に発見したことを報告し、翌日の目標について話し合いました。

それぞれの収穫を得て

研修終了時には、研修を振り返り今後とその経験をつなげるためにアンケートを実施しました。以下に、「漢語橋サマーキャンプでの一番の収穫」についての回答結果を紹介します（参加者全員回答、自由記述形式、TJF分類、複数回答あり）。

①中国語学習に関する回答	42人
②交流に関する回答	23人
③中国（文化）の体験と理解に関する回答	23人
④自己成長に関する回答	14人

①では、各技能が向上した、中国語でのコミュニケーションが実践できた、本場の中国語を体験できた、話す怖さに打ち勝つことができた、体で覚えるのが一番だとわかった、楽しさを実感できた、伝えたいという気持ちがやる気につながった、といった達成感、態度、学習ストラテジー、学ぶ意味、学習意欲などに関する記述がありました。また、学習成果と交流を関連させた回答もありました。

今後に向けて

TJFは総合的コミュニケーションのための外国語教育をめざしています。現地の高校生との交流や家庭訪問、買い物体験などは、コミュニケーションの場をつくるためであり、中国語の授業と社会・文化体験は、よりよいコミュニケーションを図るための前提だと考えています。今後もコミュニケーションをキーワードに、研修プログラムを充実させ、中国語を学ぶ、より多くの日本の高校生に研修の機会を提供していきたいと考えています。

（長江春子）

■日本の中国語・韓国語教育関連事業

高等学校韓国語中国語教師研修を開催しました

TJFは、昨年に引き続き桜美林大学と共催で「2010年高等学校韓国語中国語教師研修」を8月5日(木)から8月9日(月)の日程で実施しました。本研修は、韓国語と中国語に限らず広く外国語教育に携わる教師を対象とするプログラムを前半に設定し、外国語教育のあり方について共に考える機会としました。プログラム後半は、高校の韓国語と中国語の教師に対象を限定し、韓中合同で研修を行いました。

講義：コミュニケーション志向の外国語教育

前半2日間は、高校の韓国語、中国語の教師のほかに、英語、ドイツ語、日本語を担当する教師、あわせて約90名が参加しました。今年は、高校教師のほかに、高校との連携を考える大学の教師や、高校の外国語教育に関心のある大学院生、海外の中等教育で日本語教育に携わる関係者が参加しました。主任講師には、昨年と同じく當作靖彦氏(米国カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)をお迎えし、文法中心の学習ではなく、コミュニケーション能力を身につける学習のプロセスと評価というテーマで話していただきました。

コミュニケーション能力を身につけさせるための外国語教育を行うには、まず教師は学習者が学習する言語を使って何ができるようになるか(例：熱中していることの素晴らしさやおもしろさを口頭で伝えることができる)というゴールを設定し、そこから遡ってカリキュラムをデザインする方法(バックワードデザイン)が有効であると提示されました。また、ゴールと表裏一体の評価については、学習過程で行う形成的評価と、学習後に行う総括的評価をどのように行い、学習者にどのようにフィードバックすべきかを具体的に解説されました。

グループワーク：講義を踏まえて学習シナリオを作成

後半3日間は、主に高校で韓国語または中国語を担当する教師(各約20名)を言語別に分け、それぞれのグループに、副主任講師1名、講師2名、グループコーディネーター6名を配して実施しました。前半が広く外国語教育における理論や方法を考える内容であったのに対し、後半は、前半の講義を踏まえ、グループで具体的な授業案づくりに取り組むと

いう実践的な内容としました。具体的には、TJFが中心となって作成している高校の韓国語、中国語のための「学習のめやす」の考え方、教育目標、内容、方法を前提に、高校生に身につけてほしい能力を指標として設定し、指標達成のための学習活動の流れ(授業や単元)の作成に組み込みました。その際、学習活動のなかに組み込むべき学習要素として、言語(表現、語彙)、文化(文化理解の視点、文化事象)、21世紀に必要なスキル(高度な思考力、テクノロジーなど)の三つの領域を設定し、それらを包含した「学習シナリオ」(一連の学習活動を指す)の作成に取り組みました。

5日間の研修を通じて、参加者は高校の外国語教育の目標設定・内容・方法に関する考え方や理論に対する理解を深め、学習者のコミュニケーション能力を養成する授業のあり方を考えました。また、グループ作業を通じて、高校等における韓国語や中国語を担当している教師のネットワークを強化することもできました。今後は、上記の「学習のめやす」の作成作業を進めるとともに新たな研修の機会を設け、教育実践活動をサポートしていきたいと思っています。

5日間の研修を通じて、参加者は高校の外国語教育の目標設定・内容・方法に関する考え方や理論に対する理解を深め、学習者のコミュニケーション能力を養成する授業のあり方を考えました。また、グループ作業を通じて、高校等における韓国語や中国語を担当している教師のネットワークを強化することもできました。今後は、上記の「学習のめやす」の作成作業を進めるとともに新たな研修の機会を設け、教育実践活動をサポートしていきたいと思っています。

本研修の内容については、次号第89号(2011年1月発行)でくわしく取り上げます。ご期待ください。(中野敦)



(上) 参加者に語りかけるように講義を進める當作氏。
(下) グループワーク風景。

■中国語教育関連事業

中国での教師研修を実施しました

中国教育部、文部科学省、中国国家漢弁、TJFが共催する「高等学校中国語担当教員研修」(通称、長春研修)の7回めが、7月25日(日)から8月6日(金)まで、吉林大学(中国長春市)で実

施されました。

2009年度から、現地集合・解散とし、研修期間も第6回までの約3週間から、北京での研修等を省き、15日間に短縮しました。夏休み期間であっても学校や家を空ける期間は少しでも短いほうが参加しやすいという要望に応えるため、今年はさらに2日短縮し13日間にしました。期間は短くなりましたが、これまで2日あった途中の休日を1日に減らし、開講式の日の午後から授業を開始するなど、ほぼ昨年と同じ内容のカリキュラムにすることができました。

長春研修は、外国語としての中国語教育の専門家による授業に加え、教室外の活動が豊富に組み込まれているのが特徴です。今年は、①長春市内の歴史的建造物の見学、②東北地方の民間芸能「二人転」の観賞、③長春郊外の農村にある小学校の訪問、④中国人家庭の訪問、⑤長春市内の日本語教育実施校での授業見学



(上) ベンツやBMWが飛ばす横を、馬車が堂々闊歩する長春の大通り。(下)「为人民服务」(人民のためにサービスする)から「为人民币服务」(人民元のために働く)という新しい時代?

と教師や生徒との交流を実施しました。また、新しい試みとして、中国の生活や文化の一面を如実に伝えると思われる写真を多数撮り、そのなかから一枚を選んで発表してもらいました。視点や感じ方が撮影者によってさまざまで、お互いにより刺激になったようです。

今年の参加者は、12の都道府県から15名でした。ここ2年ほど、参加者が定員20名に達していないという現状があります。来年度に向けて、長春研修に参加したOG、OB計123名の力も借りて、より多くの中国語教師にこの研修の存在を知ってもらい、この定員枠を満たすことができるよう、広報に力を入れていきたいと思っています。(水口景子)

■中国の日本語教育関連事業

好朋友ワークショップを開催しました

8月22日(日)、23日(月)の両日、中国遼寧省瀋陽市にて、遼寧省基礎教育教學研究研修センターと共催で、東北三省(吉林省、黒龍江省、遼寧省)で第二外国語(二外)としての日本語教育を担当する中高校の日本語教師を対象にワークショップ

を開催しました。遼寧省からは約30名、吉林省からは4名、黒龍江省からは3名の研修生が参加し、中学校向け二外教育用教科書『好朋友』の日中の編集委員および編集アドバイザーが講師を務めました。

ワークショップでは、『好朋友』をすでに使っている教師のクラスと、今年9月より

導入することを予定している教師のクラスに分け、『好朋友』の理念や特徴、使い方について説明した後、研修生に実際に教案を作ってもらいました。また、導入を予定しているクラスでは、すでに『好朋友』を使用して二外の授業を実施している大連市内の教師にその実践や感想などを報告してもらうとともに、模擬授業もしてもらいました。研修生は文法中心からコミュニケーション中心、加えて文化を取り入れる授業への移行に戸惑いながらも、活発に意見を交わし、二外の『好朋友』の理念や学習活動等は一外(第一外国語)の日本語教育にも取り入れることができるのではないかという意見が出されました。



(上) 各自が思う二外のイメージを発表し合い、二外を教えるにあたっての心構えを研修生全員で共有。(下) グループに分かれ、仲間と意見を交わしながら教案を作成。

研修生の声

■二外は、一外とは違って大学入試にしばられず気楽に教えられると思っていたが、間違いであったことに気づいた。どうすれば生徒がコミュニケーションできるようになるのか、どうやって文化を学習活動に取り入れればいいのか、とても難しいことがわかった。

■模擬授業を見て、こんなに楽しく日本語の授業をしていることをうらやましく思った。楽しく日本語が勉強できるので、生徒も積極的に日本語の学習に取り組むことができると思う。

■文法中心の一外とコミュニケーション・文化中心の二外とはまったく違うものだと思っていたが、二外の教授法は一外にも取り入れることができると思った。大学入試のための授業は続くが、今回学んだことをできるだけ取り入れていきたい。

始まったばかりの二外としての日本語教育ですが、省を超えて共に切磋琢磨できる仲間ができたことも、研修生にとっ

て大きな収穫だったようです。TJFは本ワークショップの参加者向けのサイトをオープンし、サイト上で『好朋友』に関する資料や実際の教案を公開し、二外担当教師を今後もサポートしていきます。

(森本雄心)

■交流事業

「つながる」：説明会やワークショップを行っています！

教師向けの体験型の説明会のほか、生徒向けに「つながる」の趣旨や仕組みを説明しながらメンバー登録とエッセイ投稿を行うワークショップを、関東を中心とする学校で実施しています。6～7月には、大阪、富山、新潟でも実施しました。関心のある方はぜひご連絡ください(tsunagaaru@tjf.or.jp、電話03-5981-5226)。

そのほか、下記の会合で「つながる」を紹介しました。

■ 2010年高等学校中国語教育全国大会 (6月20日／富山県高岡市)

■ 米国The National Consortium for Teaching about Asia (NCTA) 日本研修ツアー参加教師との懇談会 (7月6日／TJF)



米国の社会科等の教師20名と「つながる」や「くりにくく」などの事業について意見交換をした。

■ 米国Alliance of Association of Teachers of Japanese (AATJ) 2010 Summer Institute 参加日本語教師との懇談会 (7月12日／国際交流基金日本語国際センター)

■ 高等学校総合文化祭国際・ボランティア部門 (8月3日／宮崎市)

■ 第15回日本ジャンボリー (8月3～4日／静岡県朝霧高原)



約2万人の青少年が参加するキャンプ大会(ボーイスカウト日本連盟主催)に「つながる」のブースを出展し、ワークショップを行った。

(室中直美)

■写真関連事業

「flickr」にTJF Photo Data Bankをオープンしました

TJFでは2001年にTJF Photo Data Bank 日本編を、2004年に中国編を開設し、日本語や日本理解、中国語や中国理解の授業や教材づくりに役立つ写真をみなさまに提供してきました。しかし近年、多言語検索が可能な無償のオンライン写真データベースがネット上で数多く見られるようになって

きました。そこで、2010年7月15日をもってTJFサイトでのTJF Photo Data Bankの運営を終了し、これに代えて、オンライン写真検索サイト「flickr」内に「TJF Photo Data Bank Japan」「TJF Photo Data Bank China」をオープンしました。そして、それぞれのコーナーに、TJF Photo Data Bank日本編・中国編に収録していた写真の一部を移しました。「flickr」でもこれまでと同様、キーワードで検索したり、カテゴリー別に写真を見たり、必要な写真をダウンロードしてプリントしたりすることができます。下のページに、「flickr」の使い方に関する説明を掲載しています。今後ぜひご活用ください。

■ 日本編⇒ www.tjf.or.jp/notice/pdbj/index.html



■ 中国編⇒ www.tjf.or.jp/notice/pdbc/index.html



(扇谷真佐子)

実施事業一覧 (2010年7月・8月・9月)

- 第4回中国語を学ぶ日本の高校生のための短期中国研修実施 (7～8月／中国・北京)
- 平成22年度高等学校中国語担当教員研修共催 (7～8月／中国・長春)
- 「つながる」紹介・ワークショップ (7～9月／神奈川、埼玉、静岡、東京、宮崎ほか)
- 第3回「漢語橋」世界中生中国語コンテスト西日本地区予選大会後援 (7月／京都)
- 第3回「漢語橋」世界中生中国語コンテスト東日本地区予選大会協賛 (7月／東京)
- 『国際文化フォーラム通信』第87号発行 (7月)
- 『小溪』No.45発行 (7月)
- 2010年高等学校韓国語中国語教師研修共催 (8月／東京)
- 2010年外国語担当教員セミナー共催 (8月／東京)
- 『好朋友』ワークショップ (二外日本語教師ワークショップ) 共催 (8月／中国・瀋陽)
- 『Takarabako』No.25発行 (9月)
- 『ひだまり』第44号発行 (9月)
- 『事業報告2009—2010』発行 (9月)

お知らせ

日本の教育代表団の中国派遣事業を実施します

本事業は、中国語教育に積極的に取り組んでいる地域の教育行政関係者、中国語教育実施校および中国理解教育や中国との交流に関心をもつ学校の責任者に中国を訪問してもらい、中国の教育現場を視察するとともに、中国の教育行政関係者や学校長と交流してもらうプログラムです。2008年度、2009年度にはそれぞれ、神奈川県と東京都の私学協会の協力を得て、私立の中高校の理事長・校長を含め、各年度14名を中国に派遣しました。

2010年度は初めて全国の公私立の学校長と都道府県の教育行政関係者などを対象に公募した結果、12都道府県17の機関から19名の申し込みがありました。11月に以下の概要で実施します。

- 派遣期間: 2010年11月22日(月)～26日(金)
- 派遣先: 北京市(受け入れ機関: 北京市国際教育交流中心)
- 主催: 中国国家漢弁
- 実施: TJF
- 後援: 在中国日本大使館、在日本中国大使館教育処
- 協力: 文部科学省
- 輸送協力: ANA

第32回よみうり写真大賞高校生部門「フォト&エッセーの部」応募作品募集中!

身近なひとりの高校生の素顔を写真と文章で表現した作品を募集しています。高校生であれば国内外問わず応募できます。

- 応募資格: 2010年4月現在、日本および海外の高等学校またはそれに準ずる学校に在学している方
- 応募作品: ひとりの高校生(自分自身を除く)を主人公とした、2～5枚の写真と文章(200字程度)
- 締め切り: 2010年11月20日(土)
- 発表: 2011年1月中旬

詳細は、<http://www.tjf.or.jp/thewayweare2/jp/>をご覧ください。

2010年高等学校韓国朝鮮語教育研修大阪大会が開かれます

高等学校の韓国語教師が中心となって活動しているJAKEHS(高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク)が主催する全国研修が大阪で開催されます。初日には、TJFがプロジェクトとして取り組んでいる「学習のめやす」にもとづく授業づくりについて参加者とともに討議するセッションが予定されています。高等学校の韓国語教育に関心のある方はご参加ください。

- 日程: 2010年11月27日(土)～28日(日)
- 場所: 大阪府立桃谷高等学校 新南館 多目的室
- 内容: 学習のめやすにもとづく授業づくり、交流事業に関する授業づくり、教室活動の実践例などを紹介します。26日(金)には、大阪府立佐野工科高等学校定時制の公開授業も予定されています。

詳細は、<http://sites.google.com/site/jakehshome/>をご覧ください。

編集後記

http://www.tjf.or.jp/newsletter/kouki/kouki_j.htm

TJFがかつて開催していた「高校生のフォトメッセージコンテスト」の趣旨に、よみうり写真大賞の事務局が賛同され、コンテストのコンセプトをそのまま継承するかたちで、よみうり写真大賞高校生部門に「フォト&エッセーの部」が開設されました。TJFは広報に協力するとともに、応募作品のエッセーを英訳し海外に発信しています。

2009年度に2回目の公募をするにあたって、同事務局と話し合った結果、参加枠を海外に広げることになり、その第一歩として、TJFがネットワークをもつ海外の高校で日本語を学ぶ生徒に参加資格を広げることになりました。①読売新聞の読者に日本の高校生の姿ばかりでなく、海外の高校生の素顔も紹介できる、②ウェブサイト上で国内外の高校生同士をつなぐことができる、③多様な生活文化や考え方を背景とした高校生の視点から撮られた写真に触れることによって、お互いに発想を豊かにし、視野を広げることができる、といった期待が生まれました。今号で紹介した海外からの参加作品は、こうして募集されたものです。

写真コンテストは、当然写真力を競うものですが、「フォト&エッセーの部」はあえてエッセーも要求する異色の部門です。エッセーは写真を説明する補足資料ではなく、それ自体が写真と同様に撮影者からのメッセージとして位置づ

けられています。エッセーには、撮影者と被写体である主人公との協働性や関係性が構築されていくプロセスが垣間見られ、主人公に対する撮影者の熱い視線が感じられます。写真を撮り撮られることを通して、撮影者と被写体が近づいていくのです。

海外の高校生が参加するのは今回が初めてであり、日本の高校生のように写真部に所属しているわけでもないため、上位入賞はかないませんでした。しかし、海外の作品には、写真の構成やエッセーの視点が日本の高校生とは一味違う新鮮なものが目立ちました。ある日本の写真部の高校生はそれを「黒船がやってきた」と称していたといいます。

海外からの作品を見た日本の高校生のコメントも大変興味深く、写真を見たりエッセーを読んだりしただけで、こんなに多くのことに気づき、考えるのだと感心させられました。もっと濃い交流をしたら、いろいろなことを学び合うことができるのではないかと感じさせるコメントでした。

今号では一部の作品しか取り上げられませんが、ウェブサイトには、日本の高校生の作品も含め、ほかの作品もたくさん掲載しています。ぜひwww.tjf.or.jp/thewayweare2/jp/をクリックしてみてください。

中野佳代子

財団法人 国際文化フォーラム THE JAPAN FORUM



国際文化フォーラム通信 88号
2010年10月発行

発行人・編集人 中野佳代子
デザイン・DTPオペレーション 飯野典子
フォーマット設定 鈴木一誌
出力・印刷・製本 凸版印刷(株)
校閲・校正 石井雅男・松木万里子

財団法人 国際文化フォーラム

〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14
音羽 YKビル3階
TEL 03-5981-5226 FAX 03-5981-5227
E-mail: forum@tjf.or.jp
<http://www.tjf.or.jp/>